

大地

第 48 号
2015. 1. 25. 発行
浄 國 寺
上越市朝日14-10
☎025-523-5724

「俳句」

山崎 睦

徐行して徐行してバス花の坂

光陰の早さ只只益近し

夕立や土の匂ひの風生まる

そこそこの体調にして夏に住む

木々も又心の癒しとして茂る

人生の熟柿となりてなほ落ちず

新刊の匂ひを開く炬燵かな

(平成十四年作)

初日の出の価値

山崎隆史

門松は冥土の旅の一里塚

めでたくもありめでたくもなし

室町時代の禅僧、一休禅師の歌です。

アニメ等で描かれる「とんち小坊主」の一休さんは後年の創作ですが、史実として奇行の多い変人と見られていたようです。冒頭の歌は、ある年の元日、一休が杖の先にしやれこうべ（人の頭蓋骨）を付けて歩き回りながら詠んだものだそうです。

かつて日本では「数え年」が用いられており、誕生日などは関係なく正月になると誰もが一つ歳をとる事になっていました。蛇足ながら、産まれた時点で一歳、次の正月が来ると二歳になるため、現在の数え方とは一〜二歳の差が付きます。

一月一日は天下の誰もが歳をとる、みんなの誕生日でもあったという事です。一つ歳をとる事にたいして「冥土の旅の一里塚」、すなわち死に近づいているのだから、めでたくないとも考えられる、という歌なのでしょう。年齢の数え方だけでなく、日付の変わり目も違いました。時計の普及した現代では、日の出と日の入りのちょうど中間の時刻である深夜零時に日付が変わる、というのを当たり前前に受け入れています。しかし、夜間の時

刻が分からない時代には日の出か日の入りで日替わりとするしかなく、日本の場合は、日の出の時点で日替わりという事になっていました。

つまり、初日の出と同時に、一月一日となつて年が改まり、天下のすべての人が歳をとつたのです。当時の初日の出の瞬間は、現在の一月一日深夜零時の新年を迎える瞬間と、誕生日と、その年初めての日の出とが組み合わせられた価値があったといえます。

その一方、現在の初日の出は毎年ほぼ同じ位置から昇るのに対し、昔は年によつて少しずれた位置から初日の出が昇っていました。当時（明治六年、西暦一八七三年まで）の日本の暦は「太陰太陽暦」で、「うるう月」の関係で一年の長さが一定でなく、同じ一月一日でも現在の「太陽暦」から見ると一か月ほど誤差があるからです。太陽と地球との位置関係という視点で見れば、現在の初日の出にこそ意味を見出だせます。

昔と今と、どちらの初日の出も同じ現象です。それどころか、元日以外の日の出とも、特に変わったことがあるわけでもありません。人間が勝手に特別な価値を見出すのです。そういう事を頭では分かっていますが、昔の初日の出と今の初日の出、どちらかがより価値があるように思えてしまうのも、どうにも止められないのです。

ささやかな晩酌

春日山町 金子和子

寒くなるとお酒が美味しくなる。特に私はどぶろくが好きだ。亡夫は熱燗のお酒を好んだので、生酒やどぶろくの戴き物は必然と私の胃の腑にはいる。

私が生酒の時、七・八歳のころだったろうか。蔵の二階の一番奥に甕が置いてあって、それを毎日かきまわすことを父に命じられた。蔵の重い戸をよいしょと開けて急な階段を登って行く。天窓の明りを頼りに甕の前に座り蓋を開け、しゃもじでかき混ぜる。

ある時しゃもじの汁を嘗めてみた。甘いような辛いような不思議な味だった。何日かして父がもうかき混ぜなくてもいいと言った。長じてそれは父が内緒で仕込んだどぶろくであることが理解できた。

幼い時におぼえたどぶろくの味が潜在意識となったのだろうか、冬の晩酌はどぶろく。肴は手料理の氷頭なます、鱈子とこんにゃくの甘辛煮等、その時々のお総菜。お気に入りの方に盛り付けて、ぐいのみ一杯の一人酒。ささやかな晩酌である。



巣箱



山崎隆昌

今冬は雪降りが早かった。十二月初旬にして根雪、三月末の雪解けまで雪の生活は四ヶ月余り続く。

それでも晴れた日には、積もった雪の上をエサを求めて飛び交う雀の姿が見られる。雀の他にも名の知らぬ鳥たちが次々とやってくる。可愛いものである。

一昨年の春のこと、女房殿が三十センチ程の木の箱を大事そうに抱えニコニコ顔で帰って来た。よく見ると鳥の巣箱、道の駅で購入したものだと言う。厚手の木材で、屋根もきちんと作られており、鳥の家にはいささかぜい沢な感のする代物である。

この巣箱に鳥が入ることを夢見て、早速に裏庭の紅葉の枝に取り付けた。縁側から良く見える場所で、何となく子供になったような嬉しい気分。

ところが期待に反し鳥様は一向に入居なさらない。巣箱周辺の木々には、様々な鳥たちが訪れ、楽しそうにさえずっているのだけれど新居ご利用の気配は全く無し。とうとう一度も利用されることもなく、寒い冬を迎えた。越冬住居としても空室のまま終わる。

昨年初夏の朝、巣箱の近くに鳥の影が見え

る。どうも入居の下見に来ているらしい。居住性、安全性、交通の便、周囲の住環境等々、なかなか慎重で、すぐに巣箱の中には入ろうとしない。私には知識がなく、鳥の名前は分らない。雀よりやや大型で、羽毛は暗い茶色と灰色の混じった色。第一発見者は妻。うまく入ってくれるかも、やっぱり駄目かなあと、期待と諦めの揺れる気持ちで日に何度も縁側から眺める。

数日して、ついに二羽のうちの二羽が巣箱に入る。やがて、二羽が交代（実際は交代制が分拒制か分からない）で、枯れ草や、ワラを運び巣作り。巣箱の小さな穴から出入りする姿は何とはなしにいとしいものだ。

気になると縁側から巣箱を眺めた。巣箱の中では、卵が産まれ、やがて雛に変わり、親鳥は餌を運び与えているのだろうと想像する。夏の終わりになる頃（時期はよく分からなかった）鳥の影が巣箱に映らなくなった。世に言う巣立ちなのであろう。

鳥が来て、巣作りをし、やがて巣立っていった。それを遠くから眺めている。ただそれだけのことが、心楽しく、気持ちちが和んだ。不思議なものである。

今は雪中に立つ裸木の紅葉の枝木に空の巣箱が見えるのみ。今年の春、この巣箱にまた新しい命が生まれてくれるだろうか。

名前を知る

山崎隆昌

冬の雪国に生活していて贅沢と思うのは、雪晴れの景色である。降り続いた雪は、木立に白い花を咲かせ、道路も家々も、田畑も、すべてを真っ白な新雪で化粧する。それらがやわらかな冬の光にキラキラと光る。銀色に輝く妙高や火打の山が神々しくさえ感じる。

高田の街からは遠くに多くの山々を見るこ
とが出来た。妙高、火打、焼山、米山、南葉、菱ヶ岳、近くの金谷山、これでおしまい。
情けないことに、この他の山の名を知らないのだ。目の前に見える山々を、これは〇〇山、こっちは△△山、あれは××岳です、と全て言うことが出来たら楽しいだろうなと思うし、山がもっと身近な存在になることだろう。

私のもの知らずは山だけではない。浄國寺の境内地には、季節を問わず大小さまざまな鳥がやって来る。鳥たちは、美しく時にはやかましくさえする。その鳥で知っているのはせいぜい、雀、カラス、鳩、冬に来る雉くらい。後はさっぱり駄目である。

昨年、裏庭の紅葉の枝につるした巣箱に鳥が入った。雀と鳩の中間くらいの大さきで、羽毛は茶と灰色の混色、ところが折角の名前が分からない。

作家大江健三郎の息子さんが障がいを持つ光さん（現在は作曲家）は、三歳になっても何も話さなかったと言う。三歳の夏、軽井沢の別荘での散歩中、聴こえてきた鳥の声に「クイナです」と発したのが初めての言葉であった。これは有名な話。しかし、私には鳥のクイナがよく分からないのだ。

山や鳥、木や花の名前、あるいは星の名前、身近にある一つ一つのものについて、その名前を知っていたら今少し違う世界が広がることだろう。同じように小説や随筆に出てくる花や鳥を、書かれた名前から目に浮かべることでできたなら、文章がもっと鮮やかになるだろうに思うのだ。

唐木順三は『言葉について』の講演の中で物の名前について述べている。

「盲で聾で唾のヘレン・ケラーが、七歳の時のある日、全く突然に、物には名前のあることを知る。（略）それぞれの名前のあることを知った事実を、ヘレンは知的革命であったと言っている。

そこにあるそれが何であるかを問い、それが何であるかを知る。机、松、竹、雀、馬であることを知る。ひとつひとつに灯がつき、闇は次第に消えて、明るくなってゆく。そして、あらゆるものに名前を書いた燈火がともされ、光明遍照世界がひらかれる」唐木順三著『詩と死』より

それが何であるかを問い、それが何であるかを知る。知ることにより闇は消え、光明世界がひらかれる。唐木は、何であるかを知る前提に、何であるかを問うことがあると言う。物の名前も、闇から光を求めるように、それが何かを問うことから知るのだと述べる。

私のもの知らずは、単に山や鳥や花の名前を知らないことではなく、それが何であるかを問うことが無いことにあるのだ。問いを持つことは大変難しく、難しいことであるが。問いの無い物の名前は空しく、今流行のテレビクイズ番組の答のようなもの。

知ることについて、蓮如上人は、お文（手紙）のなかで次のように書かれている。「それ、八万の法蔵をしようとも、後世をしらざる人を愚者とす。たとい一文不知の尼入道なりというとも、後世をしるを知者とすとはいえり」『お文』5帖第2通より
《意訳》八万の経文を知っていても、念仏往生の道を知らない人は愚か者といえます。文字一つ知らず仏門に帰依した女性でも、念仏往生の道を知る人は智慧のある者といえます。

《山崎隆昌意訳》

仏道の根底に「自己とは何ぞや」の問いがある。この問いを持たない人を愚者。問いを持つことができる人を知者であると領解する。明日の天気予報は晴、美しい雪景色を見ることが出来るだろう。春はまだ遠い。

ワン公物語⑨

—華のつぶやき—

山崎華（慎子代筆）



私は華。パグ犬の雌。六月には八才だった。父さんは普段は無口で口数が少ない。おまけに大きな目をしているので、黙っているのが怒っているのかなと思ってしまうことがある。でも、私を抱っこしてなでてくれる時、黙っているけれど思いをこめてなでてくれるので、父さんはそういう人なんだなって感じている。母さんは機嫌の悪い時以外はいつも何か喋っている感じだ。鼻歌も多いし、独り言も多い。こうやって並べてみると、父さんはちょっと暗い人で、母さんは明るい人なのかなあと、思いそうだけど、違うんだな、これが。ああ見えて、父さんは考え方が前向きで楽天的なのだ。父さんの楽天性は亡くなった睦お婆ちゃんのDNAだと私は思う。深く落ち込んで考え込むことも勿論あるけれど、いつもどこかで明かりを見つけて良い方へ考えていく性質のようだ。蓮姉ちゃんや私の魔法の言葉「マ〜イイか」の精神だね、きつと。母さんは暗い人では決してないのだけれど、しょっちゅう落ち込むし、どちらかというタイプに考えてしまうタイプのような。だから睦お婆ちゃんの楽天的なところがうら

やましかったし、一番好きのところだったんだって。

母さんは時々過ぎてしまったことを振り返り、あくでもないこうでもない反省しては後悔の溜め息をつく。

昨年の秋、山崎さん家に、ついに初孫が誕生した。大阪のなお（尚）兄さん達に女の子が生まれたのだ。年末近く母さんはいそいそと大阪に出かけ四日ほど赤ちゃんの側で過ごして嬉しそうに帰って来た。

嬉しいのは良いんだけど、その後時々母さんが私を抱き上げて「華、赤ちゃんが一番あなたは二番なんだからね、わかった」と言うのが私は気に入らない。母さんの意地悪！と思うけど、マ、イ、か。

赤ちゃんの興奮が収まった後、あれこれと思い出す中で、母さんはなお兄さんの左利き事件を思い出し、三日程落ち込んで自分を責めた。それは次のようなことだ。

なお兄さんは左利き、母さん達が育った時代と違って、誰も矯正ということを全く考えなかった。食事をするのも、字や絵をかくのも全て左手でやっていた、それはごく自然なこととして過ぎていた。たまに、なお兄さんの左側に誰かが座って食事をとると、肘がぶつかってしまうという不都合や、文字の筆順が変な書き方になる以外、あまり気にしたことがなかったのだそう。

母さんは又、芸術家には左利きが多いということや、郁子おばちゃんは左利きだけど、運針は両手、拭き掃除も両手で器用にやれるし、編み物や刺しゅう、鎌倉彫りもちょっとプロ並みという情報を自分に都合よくとり入れて、不安を消していたらしいのだ。

ところが今回大阪で、三十九歳になるなお兄さんがりんごをむく姿を見てガク然としたらしい。実に危なっかしい不器用な格好で、りんごの皮をむいていたのだ。

母さんの受けた衝撃は、じわじわと後になつてやってきたらしい。昌子姉さんが言った

「あ、包丁は普通右利き用だからね」の一言
隆史兄さんの「変なむき方してたんだ」という切なそうな一言。母さんはいいに落ち込んでしまう。たとえほんなふうにも。「私は彼の左利きを見て見ぬふりをしてたのだ。もう少し心を尽くして、見守るべきだったのだ」
マイナス思考の迷路に落ち込んでいるところに、昌子姉さんが石を投げる。「今更贖罪みたいは何やら言われてもナオだって困るよ、それより、左利きの包丁やハサミを、使ってみて、さり気なくあげる方が余程よいと思うよ」「うそうか、そうかもね」。

やがて母さんは自分を取り戻し、そのうち鼻歌を歌い出すのだ。母さんて単純でもあるのだけれど、やっかいな人だと私は密かに思う。でも、マ、イ、か。（以下 次号）